



上智大学創立 100 周年
上智短期大学創立 40 周年
上智社会福祉専門学校 50 周年



ザビエルと上智大学

No. 37



市谷キャンパスにあるザビエル像

1. ザビエルと上智大学

上智大学の始まりは、「都に大学を！」と願った 16 世紀のキリスト教宣教師、聖フランシスコ・ザビエルの志にある。本学のアイデンティティーの一部となっているザビエルとはどんな人物で、上智とどんなつながりがあるのだろうか？

実は、ザビエルの残した書簡に「都に大学を！」というフレーズそのものはない。彼が望んでいたのは、日本の都（当時は京都）やその周辺において、ヨーロッパで言う「大学」にあたる教育機関に赴いて、僧侶らと思想交流や宗教討論をすることであった。

パリ大学の学位を持つ教養人であったザビエルは、日本や中国のように独自の文化を形成した地域における布教には、まず知識人を対象とすることが有効と考えた。

実際、ザビエルらイエズス会の宣教師は、天文学や数学など科学の知識を伝えることにより、現地の人々の信頼を

獲得していた。たとえば中国では、日食の正確な時間を割り出して皇帝や官僚を驚かせている。

つまり、ザビエルは、宣教の方法として「都」と「大学」を選んだわけで、それが 3 世紀以上を経た 1913 年に東京の上智大学として開花したことは、ザビエルの意思をはっきりと反映させたものといえるだろう。

2. ザビエルの回心

フランシスコ・ザビエルとは何者なのか。彼は 1506 年、フランスとスペインの間に広がるバスク地方の貴族の末子としてザビエル城で生まれた。この地域は昔からフランスとスペインの争奪の舞台で、フランス側についたザビエル家は敗戦を機に没落し、ザビエルは 7 歳にして父を亡くした。兄達が復興のため努力をする中、ザビエルは聖職者か学者としての成功をめざし、当時カトリックの最高学府とされたパリ大学に進学した。この頃、彼は立身出世を夢見るごく普通の青年だったようだ。

パリ大学で放蕩三昧の生活を送っていたザビエルの周りに、同郷だが兄達の敵の陣営にいた 14 歳年上のイグナチオ・デ・ロヨラが集まってきた。ロヨラはザビエルと寮で同室になり、この世の成功ではなく神の国のために有意義な「心の救い」をザビエルに説き続けた。

ザビエルは最初耳を傾けなかったが、最愛の母マリアと敬愛する姉マグダレーナの訃報に触れて、生き方の見直しを迫られた。修道院にいたマグダレーナは、ザビエルが「神の国で大いなることをなすように」と祈り続け、頻繁に彼と文通し、兄達が資金難から彼を故郷に呼び戻そうとしたときには強く反対した。心の支えになっていたであろう彼女の死が引き金となって、ザビエルは人生の方向転換をした。

姉の死から間もない 1534 年、ザビエルは立身出世の道を放棄するかのようになり、イグナチオらとともに生涯の清貧・貞潔の誓いを立て、後にカトリック修道会「イエズス会」となるグループをパリのモンマルトルで結成した。

3. アジアでの活動

イエズス会の若者達は、貧しい人々や病人を助けながら自らも托鉢して生活し、教皇パウルス 3 世から修道会として認可を受けるほどに人々の信頼を獲得していった。この評判がポルトガル王ジョアン 3 世に伝わる。折りしも国王は、ポルトガルの植民地ゴア（インド）にいるキリスト教徒の風紀の乱れにどう対処するか苦心しており、まじめで優秀な宣教師を探していた。ザビエルは当初インド派遣候補者ではなかったが、当初派遣されるはずだった人物が急病になり、即決、ザビエルのインド行きが決まった。

インドのポルトガル人たちは、評判どおり手の施しようのない状態だった。ザビエルは神学校の横に大きな井戸を掘り、そこに集まってくる現地の人を相手に宣教した。そのうち、ゴアのポルトガル人の不遜な態度に業を煮やし、5 ヶ月滞在しただけで南インドの貧しい漁村に移動。そこで 1 年以上漁民を相手に宣教した。

その後マラッカにおいて、好奇心と知性にあふれた日本人ヤジロウ（アンジロウ）と出会った。これをきっかけに、日本での宣教を夢見るようになり、1549 年、当初の予定になかった来日を実現した。ザビエルは都において天皇や将軍に謁見しようとしたが、戦乱の京都でその願いはかなわず、わずか 10 日で都を去る。山口に宣教の拠点を築いたものの、ザビエルが当初思い描いていた計画よりもおそろくつましい結果であった。日本宣教のためには、まず日本の文化に影響をもつ中国の宣教から始めるべきだと考えたザビエルは、中国南方沖の上川島で船を待ちつつ病死した。46 歳だった。

ザビエルの人生は一見すると「失敗」かもしれない。しかし彼が故郷で貴族的な聖職者として生きる道を捨て、心の声に従いながら希望を持って挑戦したがゆえに、はるか遠い日本の歴史にも影響を与える結果となった。そして、目に見える成功よりも神と人に仕えることを選んだザビエルの生き方は、本学の標榜する「他者のために、他者とともに」につながっているのである。



史資料室所蔵のザビエル肖像画（作者、年代不詳）